

本日、ご参加いただきありがとうございます

- 簡単な紹介をお願いします。
- 自己紹介 場所など
- 参加の興味・関心などの根拠などお聞かせください。
- 本日のテーマ「**北斎の生涯と作品の軌跡**」です。

# 葛飾北斎の生涯(1760~1811)



①

誕生から  
幼少期  
19歳まで  
1760~1778

- ・ 本所生まれ
- ・ 名は時太郎
- ・ 6歳の頃から絵を描くのが好きな子
- ・ 1778年に浮世絵師勝川春章に入門した。

②

習作の時代  
春朗期  
20~35歳  
1779~1794

- ・ のち鉄蔵か春朗に改名
- ・ 遊女を描いた役者会を发表  
浮世絵200点
- ・ 寛政4年勝川派を離脱する

③

宗理様式の時代  
35~45歳  
1794~1804

- ・ 「宗理」という落款で作品発表
- ・ 宗理派の確立
- ・ 肉筆画や狂歌絵本の挿絵に挑戦
- ・ 新生宗理派の独自の様式完成
- ・ 寛政10年「北斎辰政」と襲名

④

読本挿絵と肉筆画時代  
45~52歳  
1804 - 1811

- ・ 読本の挿絵に傾注
- ・ 肉筆画の制作  
心血を注ぐ「潮干狩図」「酔余美人図」
- ・ 曲亭馬琴とのペア  
により長編小説挿絵
- ・ 西洋の透視図法を取り入れる  
(富嶽三十六景)

# 葛飾北斎の生涯(1812~1849)



⑤

絵手本の時代  
53~70歳  
1812 - 1829

- ・北斎漫画制作
- ・北斎写真画譜
- ・北斎画式
- ・東海道名所一覧(錦絵)

⑥

錦絵の時代  
71~74歳  
1830 - 1833

- ・風景版富嶽三十六景(錦絵)
- ・風景画への取り組み
- ・諸国瀧廻り(大判錦絵)
- ・各地の橋梁をテーマ
- ・花鳥画

⑦

肉筆画の時代  
75~90歳  
1834 - 1849

- ・錦絵から離れ浮世絵を逸脱
- ・肉筆画への取り組み
- ・画本彩色通(絵手本)
- ・宗教画や自然画を描く

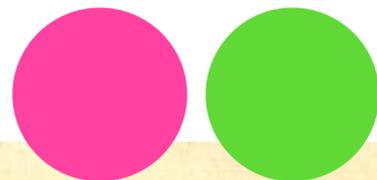
北斎の生涯





# 葛飾北斎の風景画

北斎年譜



○ **神奈川沖浪裏**（**かながわおきなみうら**）・・・葛飾北斎の名所浮世絵揃物『富嶽三十六景』全46図中の1図。現在は「神奈川沖波裏」とも表記する。横大判錦絵。

「凱風快晴」「山下白雨」と合わせて三大役物と呼ばれ同シリーズ中の傑作で、画業全体を通して見ても最も広く世界に知られている代表作である。

○. 凶暴なまでに高く激しく渦巻く波濤と、波に揉まれる3艘の舟、それらを目の前にしつつ、うねる波間から遙か彼方にある富士の山を垣間見るといふ、劇的な構図をとっている。一筋一筋の水の流れ、波濤のうねり、波に沿わせた舟の動き、富士山のなだらかな稜線といったものはすべて、幾重にも折り重なる**対数螺旋**の構成要素となっている。

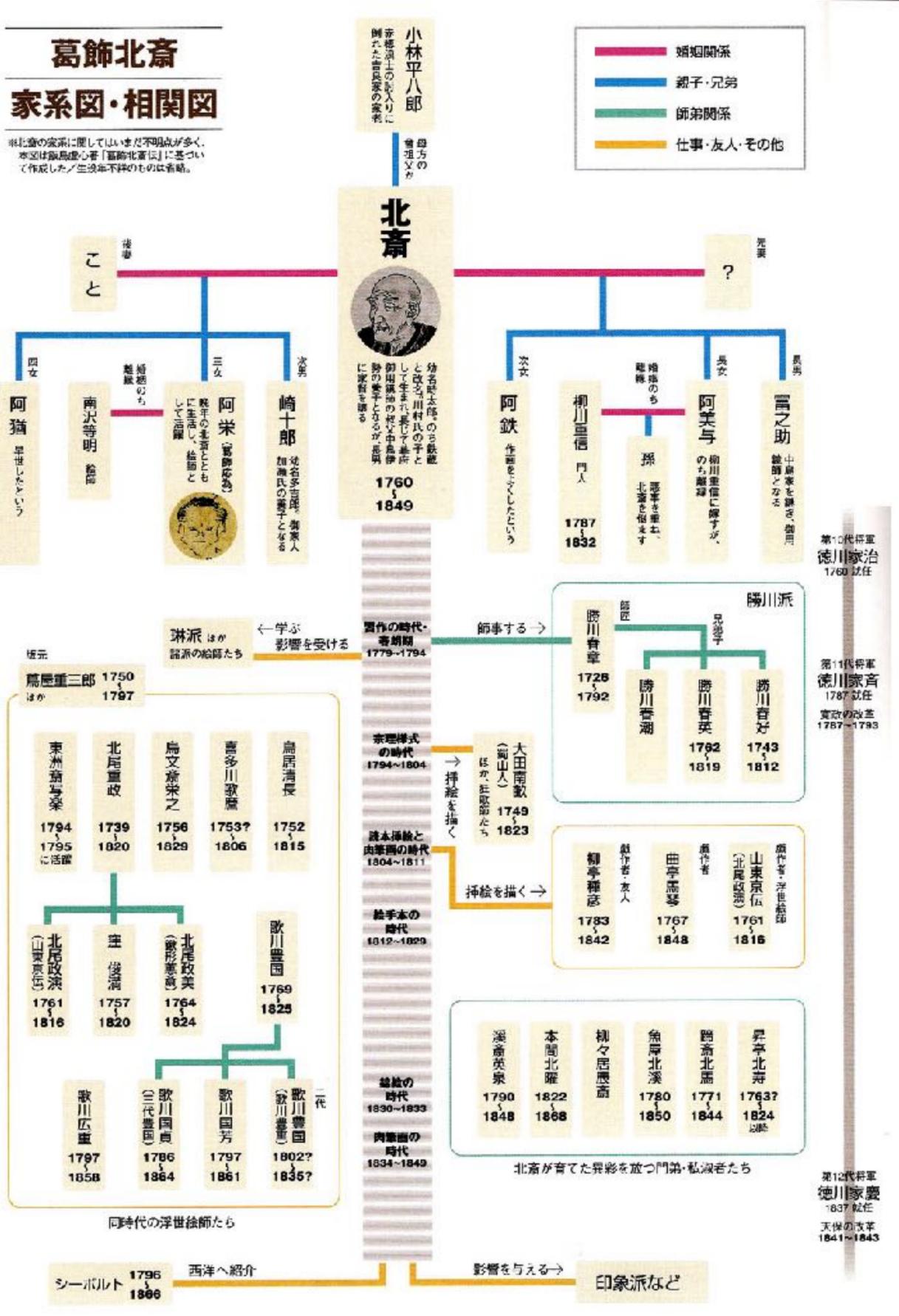
○. モデルの地については様々な説がある。「神奈川沖」とは現在の神奈川県横浜市神奈川区の沖合であるが、図中の三艘の船は押送船と呼ばれ、房総半島から江戸に海産物を運ぶ際に利用されたものであるため、東京湾で神奈川の対岸にあたる**木更津**(千葉県)の沖合付近から富士を望んだという説がある

富嶽三十六景シリーズ「神奈川沖波裏」を見たフランスの作曲家ドビュッシーは、交響曲『海』を作曲した。

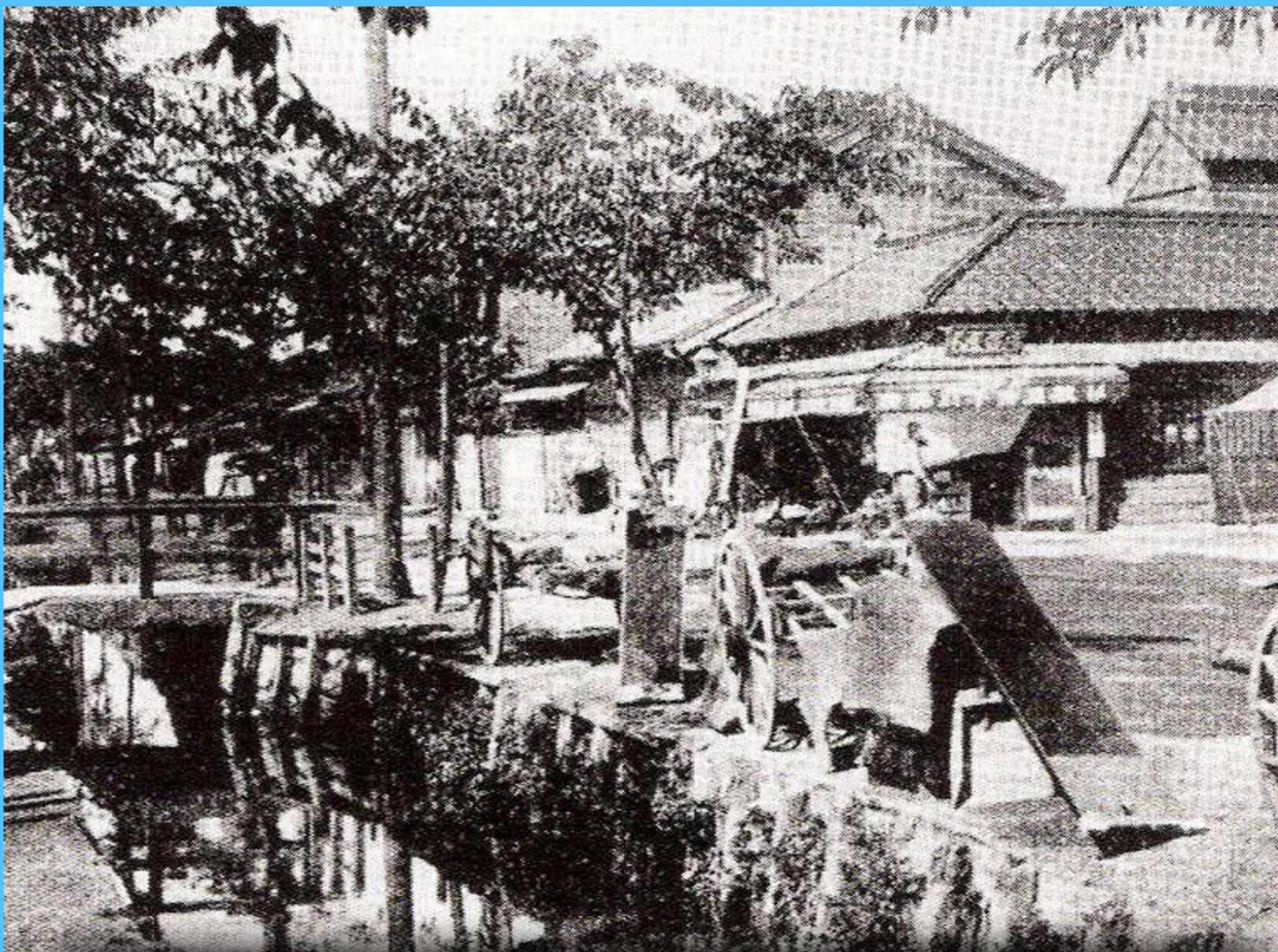
# 誕生・幼少期(1~19)

## ゆかりの地

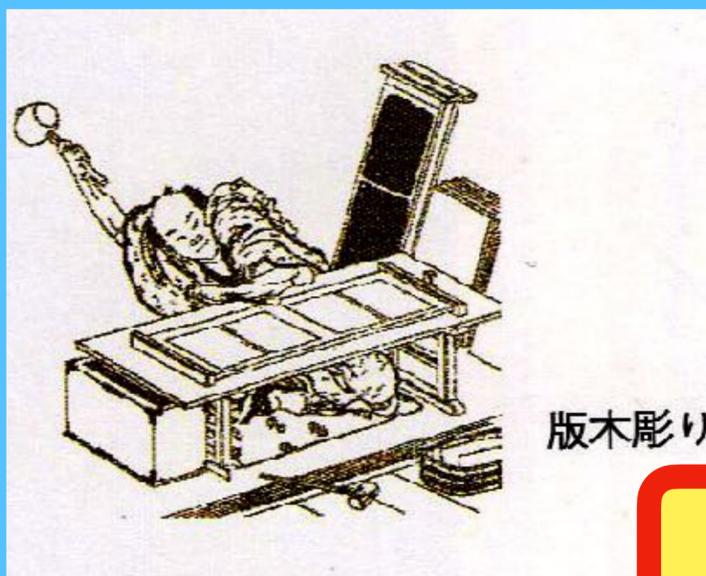
- 北斎がこの世に生を受けたのは、**1960年**。しかし、そのほかの出自や幼少期の様子を詳細に物語る資料は少ない。出生地は**下総国本所割下水**で、幼名を**時太郎**といい、のち**鉄蔵**に改名したとある。
- **川村氏**の子として生まれ、叔父にあたる**幕府御用鏡師中島伊勢の養子**となるも、のちに実子に家督を譲って**川村家**に戻った。
- 作画への興味を示しはじめたのは**6歳頃**のことといい、これは晩年、富嶽百景の跋文で語っていることである。
- 北斎が6歳だった**明和2年(1765)**は、木版技術の改良により多色摺の錦絵が完成した、浮世絵版画界にとって記念すべき年であった。



# 北斎の幼少期・少年期(葛飾)



「明治時代の本所南割下水」 墨田区立緑図書館  
 北斎が生まれたとされる本所割下水は、今の東京都墨田区亀沢1～4丁目にあたる場所。割下水とは、道の真ん中に掘割が設けられていたことに由来する。

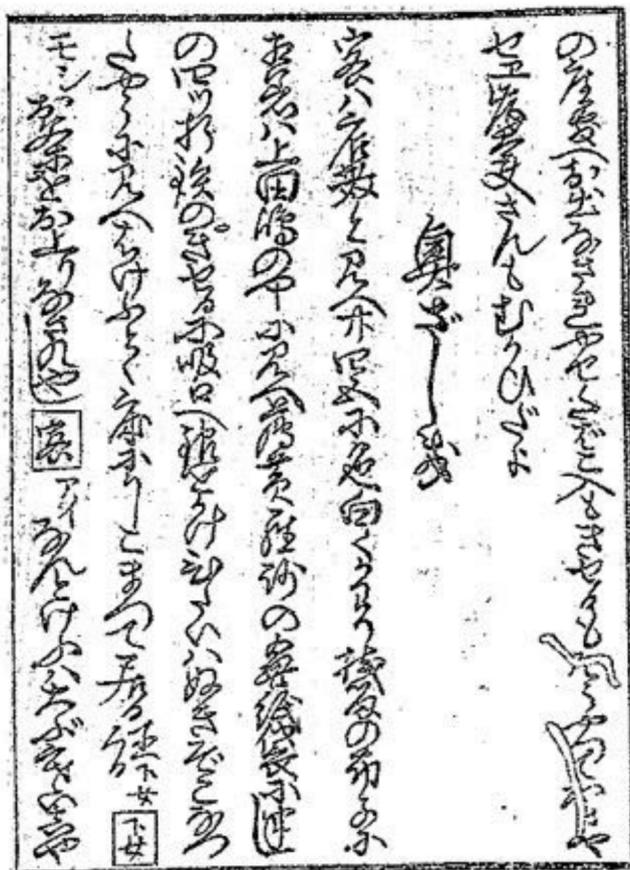


版木彫り

貸本屋



**6歳の頃貸本屋と  
版木彫りに通う**



雲中舎山蝶作『楽女格子』  
 洒落本 安永4年(1775)  
 16歳の北斎が、版木の文字彫りを行ったとされるもの。全18丁(36ページ)のうち、3分の1にあたる末6丁を任されたという。

1779(20歳)~1794年(35歳)

# ①-1・習作の時代・春朗期

## ○ 歌舞伎役者を描いた記念すべきデビュー作



○ 岩井半四郎のかしく「細版錦絵」安永8年(1779)20歳・・・勝川春草は、リアルなタッチの役者似顔絵を次々と発表し、形式化していた当時の役者絵に新風を吹き込んだことで人気を得ていた浮世絵師である。春草へ入門の翌年、鉄蔵は早くも遊女を描いた簡単な挿絵と四枚の役者絵を発表し、画界にデビューしたと見られている。

○ 画名は勝川春朗。春草の「春」と、春草の別号である旭朗井(きょくろうせい)の「朗」をとった名である。

1779(20歳)~1794年(35歳)

## ①-2・習作の時代・春朗期



- その後の春朗はひたすら作画に励み、修行を重ねていった。春朗期約「5年間に遺した作品は現在確認されているだけでも、浮世絵版画約200点以上、黄表紙などの挿絵
- えごよみ本約50種類以上、ほかに若干の絵暦など、驚くほど膨大な数に上っている。
- 「**忠臣蔵**」の浮世絵・・・ストーリーを凝縮した大画面ならではの緻密な構図忠臣蔵討入(大判錦絵3枚続)「仮名幸恵忠臣蔵」11段目を題材とした錦絵。大判3枚続というワイドな画面をフルに使い、高家に討入った浪士や逃げまどう女性の姿など細部にわたって描き込まれ、通常の11段目とは異なった個性的な作品となっている。
- 北斎は、叔父にあたる**中島伊勢の養子**になったと伝えられているが、その中島家の屋敷は**吉良邸跡地の一画を拝領**したものであった。つまり、曾祖父ゆかりの地に、北斎が一時期住んでいた可能性があることになる。曾孫説の真偽のほどは不明だが、深い縁が感じられるエピソードである。

1779(20歳)~1794年(35歳)

## ①-3・習作の時代・春朗期



新版浮絵両国橋夕涼花火見物之図

勝春朗画 啓元承壽堂 西村再板

○ 両国橋を中心とした大川端での納涼期間は、旧暦5月28日からの3カ月間。町中での花火が禁止された時代でもあり、江戸っ子は川開きの花火大会を心待ちにしていた。**春朗期の浮絵**のなかでも最も著名な本図には、その賑わいが細やかな筆づかいで表現されている。両国広小路にひしめく飲食店や見世物小屋、大川（隅田川）に繰りだした納涼船や花火を上げる花火船など、風俗資料としても興味深い。出版時から人気のあった錦絵らしく、色を変えた後摺もだされている。

○ 浮絵・・・浮世絵に**西洋画の透視図法**（遠近法の一つ）を採り入れたものを浮絵という。奥村政信らによって**1740年代頃**からはじめられたと見られ、当初は一画面中に透視図法と従来の技法が混在した違和感のあるものだった。その後、歌川豊春が透視図法をより正確に消化した作品を発表。浮き上がって見えるかのような斬新な視点に当時の人々は驚き、浮絵ブームが巻き起こった。春朗期の北斎もまた浮絵に興味を占めした。

1794(35歳)~1802年(43歳)



『西本東都遊』王子海老屋・享和2年(1802年43歳)

## ②-1・宗理様式の時代



『東遊』王子海老屋・寛政11年(1799年・40歳)

○. 勝川派を去ったのちの寛政7年正月、春朗は「宗理」という新たな落款で作品を発表しはじめた。この画号は、桃山時代末期俵屋宗達や本阿弥光悦らによって開かれた琳派の絵画様式を目指し、俵屋と称した一門（宗理派）の頭領が用いたものである。それまでの方向とはまったく異なった画派になぜ身を投じたのかは明らかとなっていない。

○. 春朗期に手がけたような錦絵の作品はほとんど見られなくなり、浮世絵界に君臨する勝川派からの離脱が破門に近い形だったのではないかと推測される。その後、新生宗理派ともいべき独自の様式を完成させ、摺物や狂歌絵本の世界で評判を得るなど、宗理は確固たる地位を築いていった。

1997(38歳)~1798年(39歳)

## ②-2・宗理様式の時代



○ 38歳の北斎が当代一流の絵師に劣らぬ活躍を見せていたことがわかる。本国は表題にあるように江ノ島を望む七里ヶ浜の景観を淡い色調でまとめ、うららかな春の日を描写したもの。裏側までをも描き込んだ波に、後年の「富嶽三十六景 神奈川沖浪」へと連なる北斎独自の視点がうかがえる。

○ 「さむたらかすみ」1798年(39歳)・・・和らかい色が春のうららかな一日を演出。富士の山を大きく望む峠の茶屋であろうか。そこに集う人々の様子が温かみのある配色で描かれ、轆轤鉋(ろくろかな)を回す女房の動的な姿勢からは軽快さも漂う。

1798(39歳)~1801年(42歳)



亀図・中判摺物1798(39歳)

## ②-3・宗理様式の時代



潮来絶句集1802年(42歳)

○ **改名を言祝ぐ賛を付子し自費で版行した摺物**・・・宗理号を俵屋に返上し、北斎辰政となったことを報せるため知己に配布した摺物。北斎が自ら描き、自らまかなって版行した摺物としては希少な作例である。回申に見える賛は稲葉華溪の書によるもので、「宗理ぬしの改名に北辰の光りいよいよましなん事を 苔む花こや衆生のもてはやし 友人華溪題」とある。

○ 水郷の里潮来に暮らす遊女の慕情を題材とした狂詩本で、享和2年（1802）頃の出版と推定。北斎の挿絵も淡く美しい色調でまとめられ、全16図にわたって抒情的な雰囲気漂わせている。美人画を中心とした狂歌絵本は、北斎としては極めて珍しい部類のもの。作者の富士唐磨が後年記したところによると、豪華な色摺だったことが、幕府の出版取締令に触れ、刊行直後絶版を命じられたとも伝えられている。そのためか、本作品は北斎挿絵本の稀書のひとつとなっている。

1800(41歳)~1802年(42歳)

## ②-4・宗理様式の時代

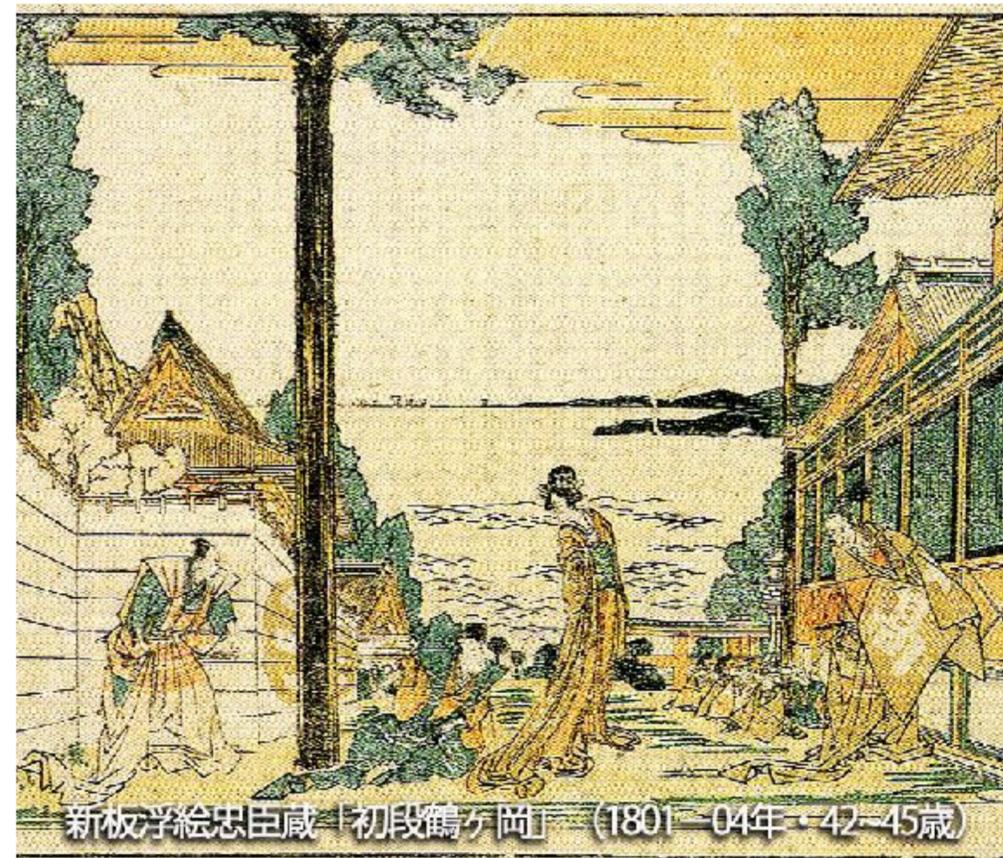
風流なくてななくせ「遠眼鏡」錦絵  
(1801~04年・42~45歳)



○風流なくてななくせ「望遠鏡」1801~04年(42~45歳)・・・落款にある「可候」は、この時期使用されはじめた画号。表題から見て版行当初は7枚揃の予定だったと思われるが、現認されているのは本図ともう1図のみ。**雲母摺(きらずり)**の**大首絵**(おおくくびえ)としても稀少な遺例である。口を小さく開いて遠眼鏡(望遠鏡)を一心にのぞく娘の癖は、さしずめ「物見癖」といえるだろうか。瓜実顔(うりぎねがお)・富士額(ふじびたい)の宗理様式を示す、壮年期美人画の傑作である。

\***雲母摺(きらずり)**・・・雲母の粉を用いて刷る大首絵 - Wikipedia

大首絵は、江戸時代に描かれた浮世絵の様式のひとつで、役者や遊女、評判娘などを半身像や胸像として捉えて描いた浮世絵版画を指す。手法。銀粉のような効果が得られる。

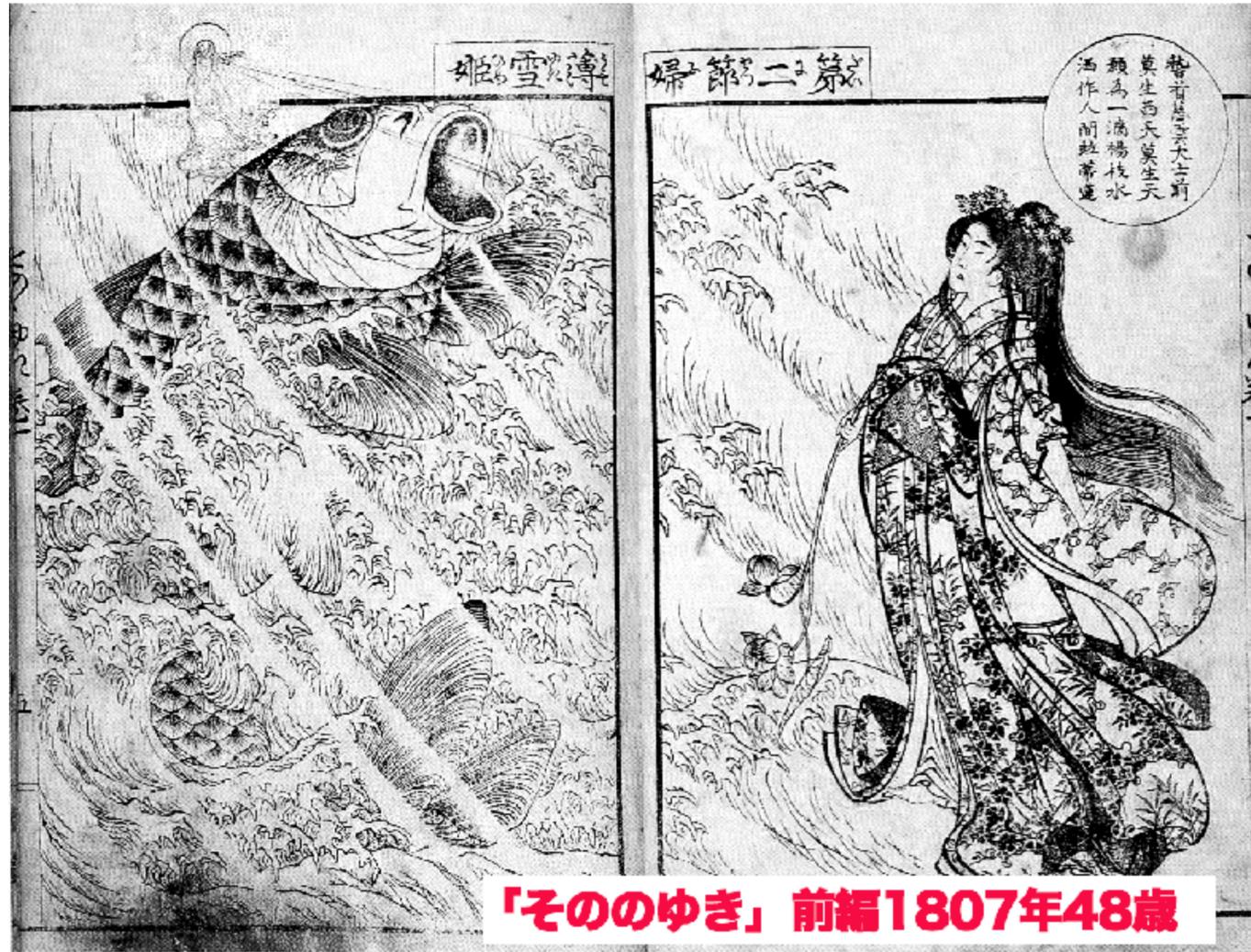


新板浮絵忠臣蔵「初段鶴ヶ岡」(1801~04年・42~45歳)

『**仮名手本忠臣蔵**』を題材とした11枚一組の錦絵。本図に描かれているのは、高師直(吉良上野介)が塩冶判官(えんやはんがん・浅野内匠頭)の妻に横恋慕する鎌倉・鶴岡八幡宮社頭の場面。これが原因となって物語は討入りへといたる。北斎は、すでに春朗期から試みていた浮絵の技法を全図にわたって巧みに駆使し、歌舞伎小屋の風景をそのまま写し取ったかのような臨場感あふれる作品に仕上げている。

1804(45歳)~1811年(52歳)

# ③-1・読本挿絵と肉筆画の時代



「そのゆき」前編1807年48歳



曲亭馬琴(1767~1848)



「鎮西八郎為朝外伝椿説弓張月」前篇 1807年48歳

○ 文化年間に入ると、北斎は読本の挿絵に傾注していった。寛政の改革による出版統制を受けて黄表紙や洒落本が逼塞(ひっそく)するなか、幕府の意向に沿った道徳的で教訓的な読本が世に流行りはじめていたのである。読本の大半が墨一色が薄墨を施す程度で表現しなければならないという制約もあった。絵師の手腕が大いに問われる分野だったのである。

○ 数多くの読本で顔を揃えた馬琴と北斎だったが、その関係は一触即発の状態にあったという。両者が初めて衝突したのは、文化四年(1804年)のこと。『新編水滸(すいこ)画伝』後編の挿絵に関して議論となり、それぞれが降板すると言いだした。結局この件は、「画伝」とあることから版元が北斎を支持し、翻訳者を高井蘭山に変えて決着を見た。

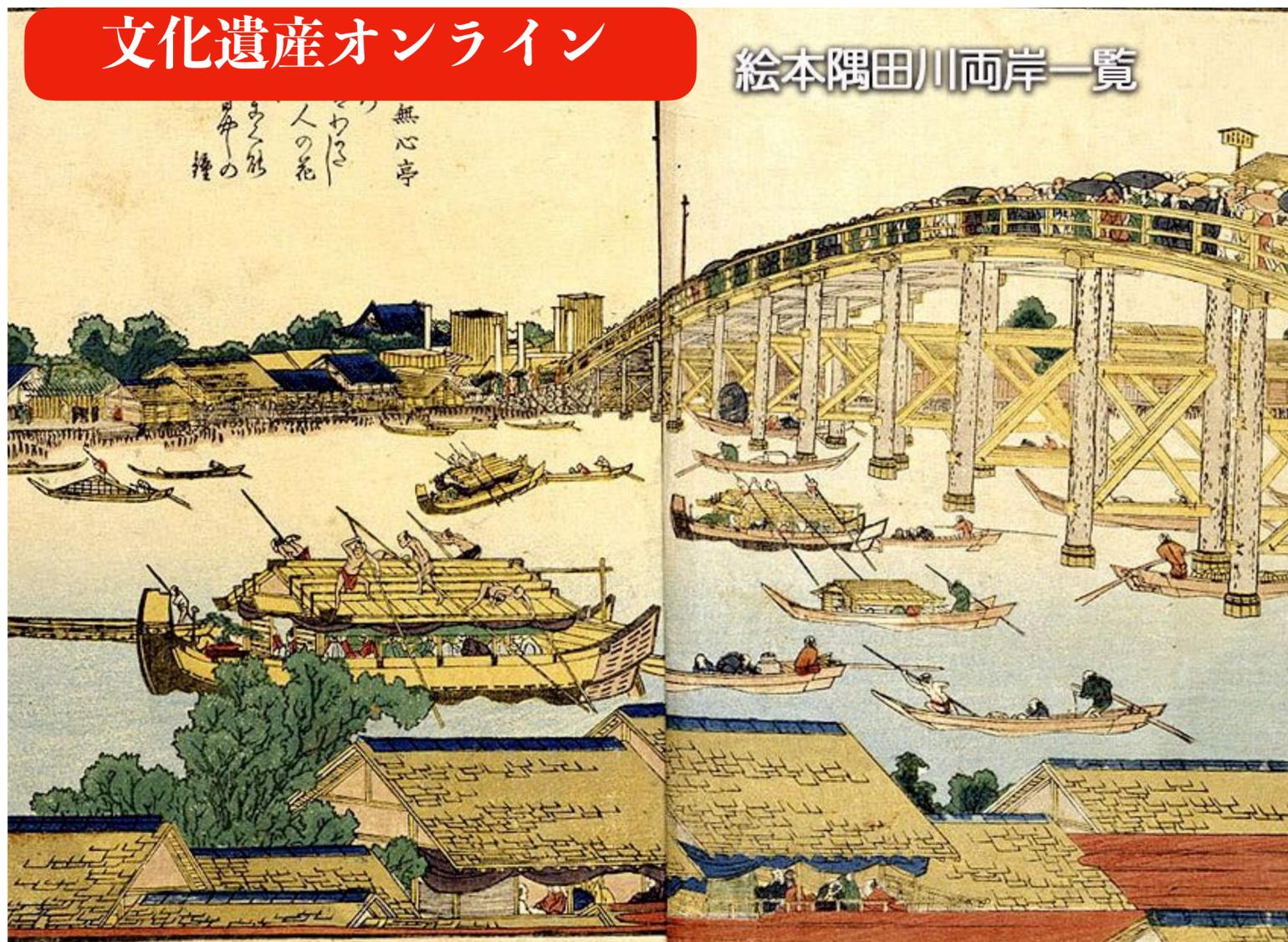
○ 『鎮西八郎為朝外伝椿説弓張月』前篇(ちんぜいはちろうためともがいでん・ちんせつゆみはりづき)表題に椿説(珍説)とあるように、史実とは異なった源為朝の一代記を、全28巻29冊にわたってまとめ上げた読本。曲亭馬琴と組んだ初の長編小説であり、両者ともに代表作として知られている。

1804(45歳)~1811年(52歳)

## ③-2・読本挿絵と肉筆画の時代

文化遺産オンライン

絵本隅田川兩岸一覽



国立国会図書館デジタル  
コレクション

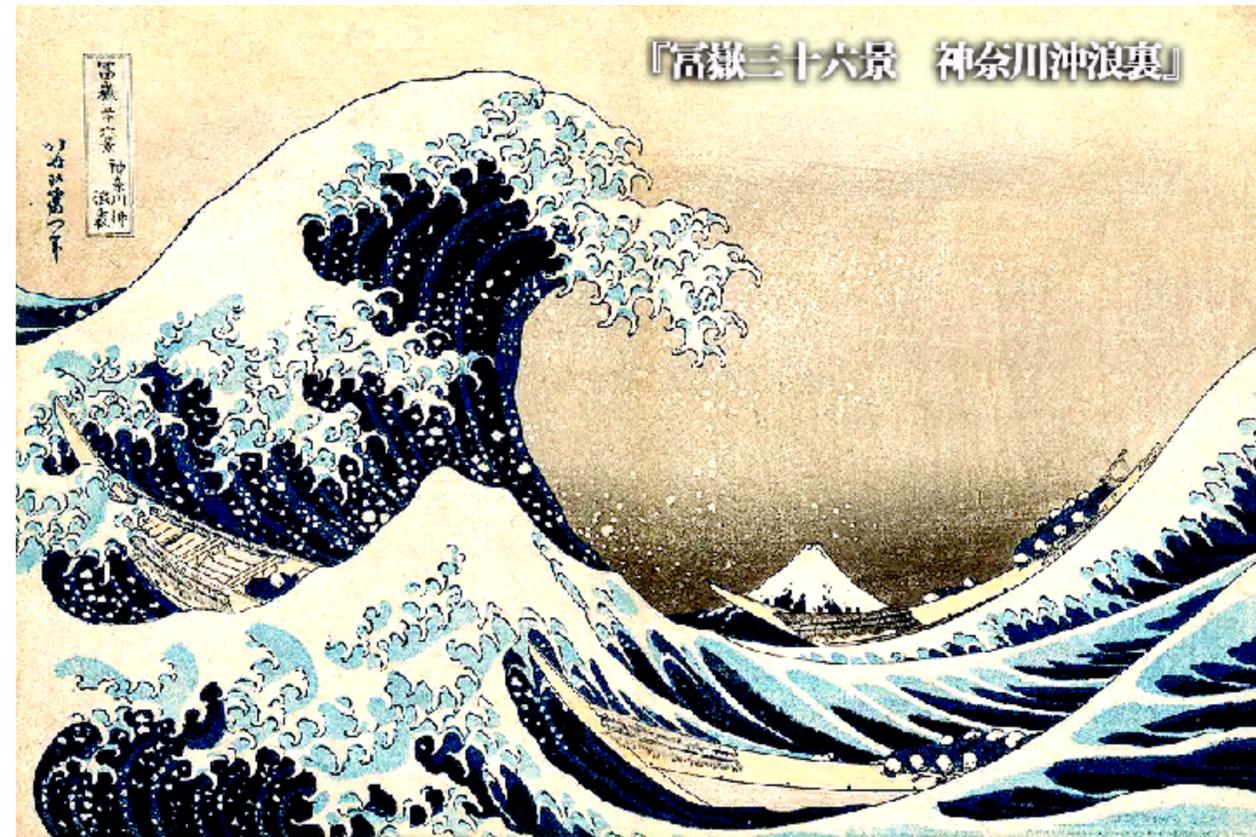


絵本隅田川 兩岸一覽

○ 狂歌絵本に描かれているのは、「高輪の暁鳥」から「吉原の終年」まで、**隅田川沿いの景観を季節の移ろいとともに描いた21の場面**。そのすべてが3冊にわたって連続しており、ページをめくるごとに川を遡り、季節も正月から年の瀬へと移り変わる趣向となっている。宗理様式による細やかな風俗描写や工夫を凝らした構図もみごとなもので、**北斎狂歌絵本中、最高傑作のひとつ**と評されている。刊行年は不明だが、**文化3年(1806・47歳)頃**とする見解がある。

1804(45歳)~1811年(52歳)

### ③-3・読本挿絵と肉筆画の時代



AIで動画にしたら?

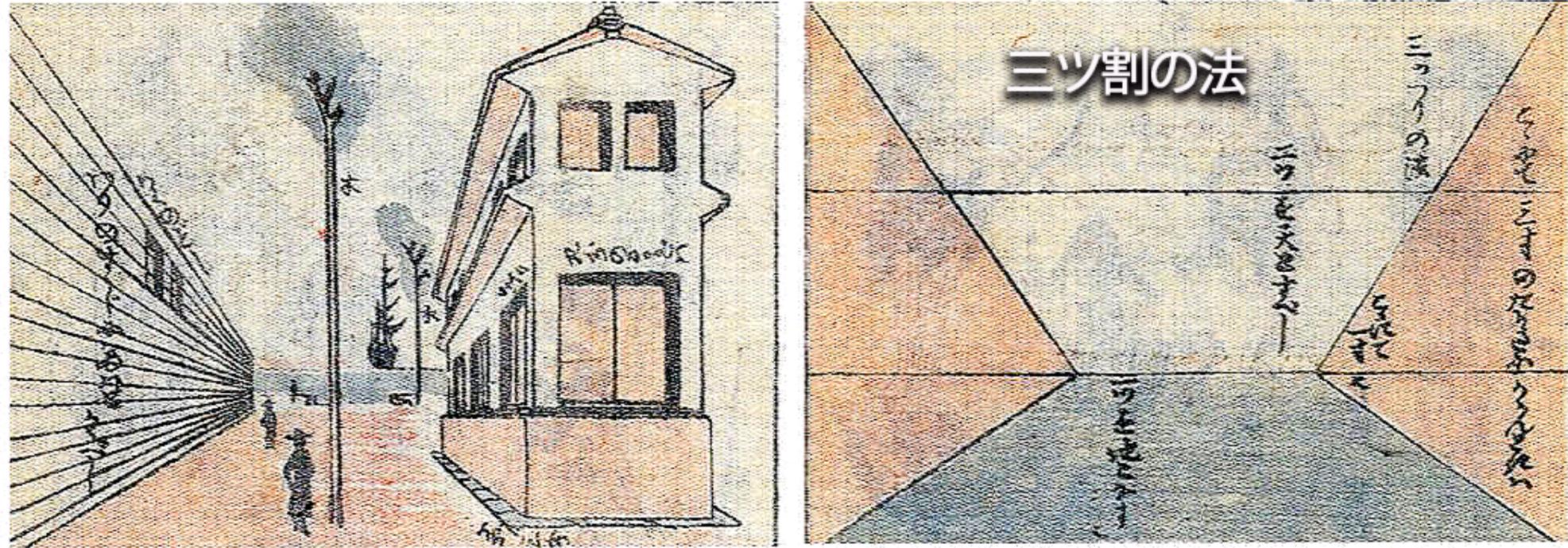
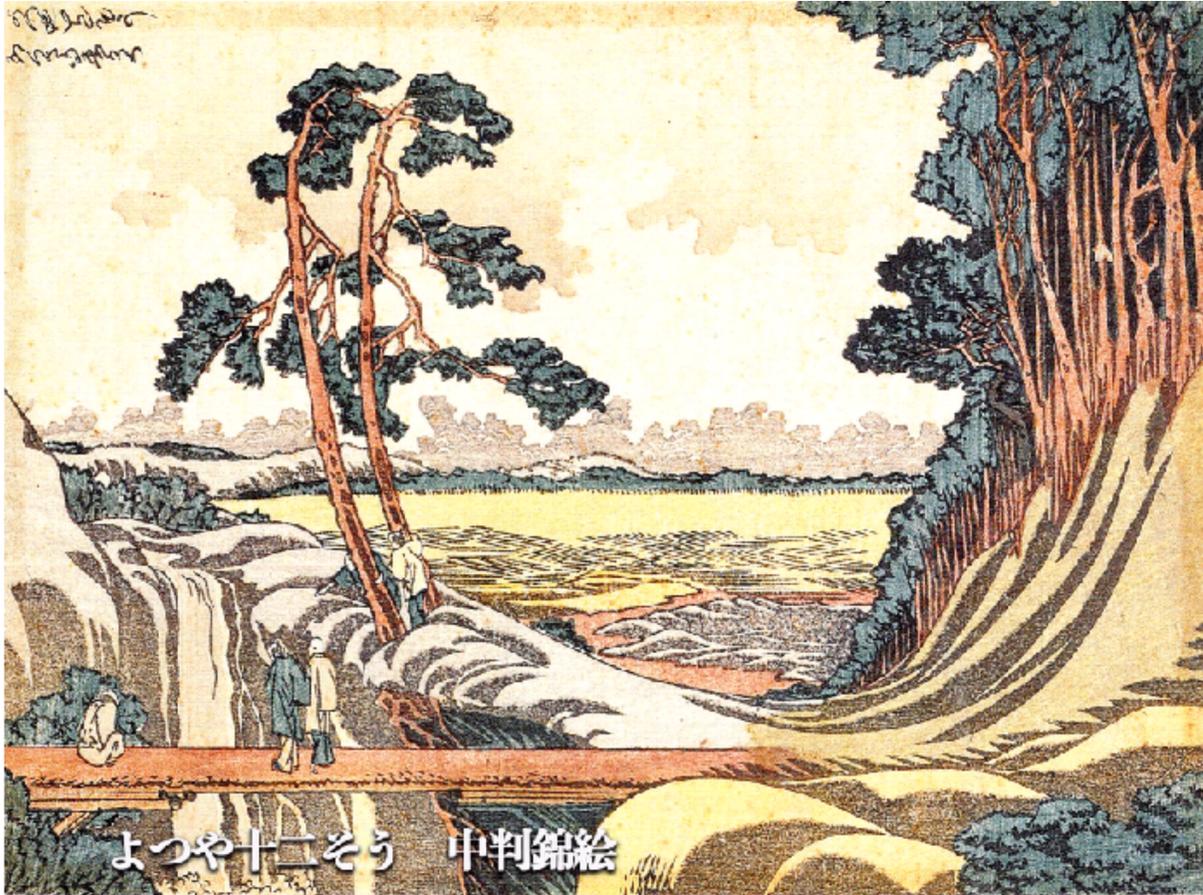


○ 享和から文化年間にかけての1800年代初頭、北斎は洋風画の表現方法を採用入れた数種の作品を発表。そのひとつが、唐草模様風の茶色地の粹がある**横間判**(よこあいばん)錦絵のシリーズで、本作品のほかに4図が知られている。いずれも板ぼかしとよばれる技法を用いることによって明暗がより強調されており、本図はそのなかでも最も板ぼかしが多用されている。『**富嶽三十六景 神奈川沖浪裏**』へと連なる、波を大胆に捉える構想も認められる。

○ 『**富嶽三十六景 神奈川沖浪裏**』1831年72歳・・・眼前で激しく逆巻く大波と波間の遙か遠くに鎮座する富士山。動と静、遠と近を対比させる絶妙な構図は、海外でも「グレート・ウェーブ」と称され、**画家ゴッホや作曲家ドビュッシー**をはじめ世界的に賞讃を受けた。波に翻弄される3艘の船は「押送り舟」と呼ばれる舟で、伊豆や安房の方から江戸湾に入り、日本橋などの市場に鮮魚や野菜を運搬していた。**千葉県木更津方面から江戸湾を臨んで描いたとの説**もある。

1804(45歳)~1811年(52歳)

## ③-4・西洋からの透視画法



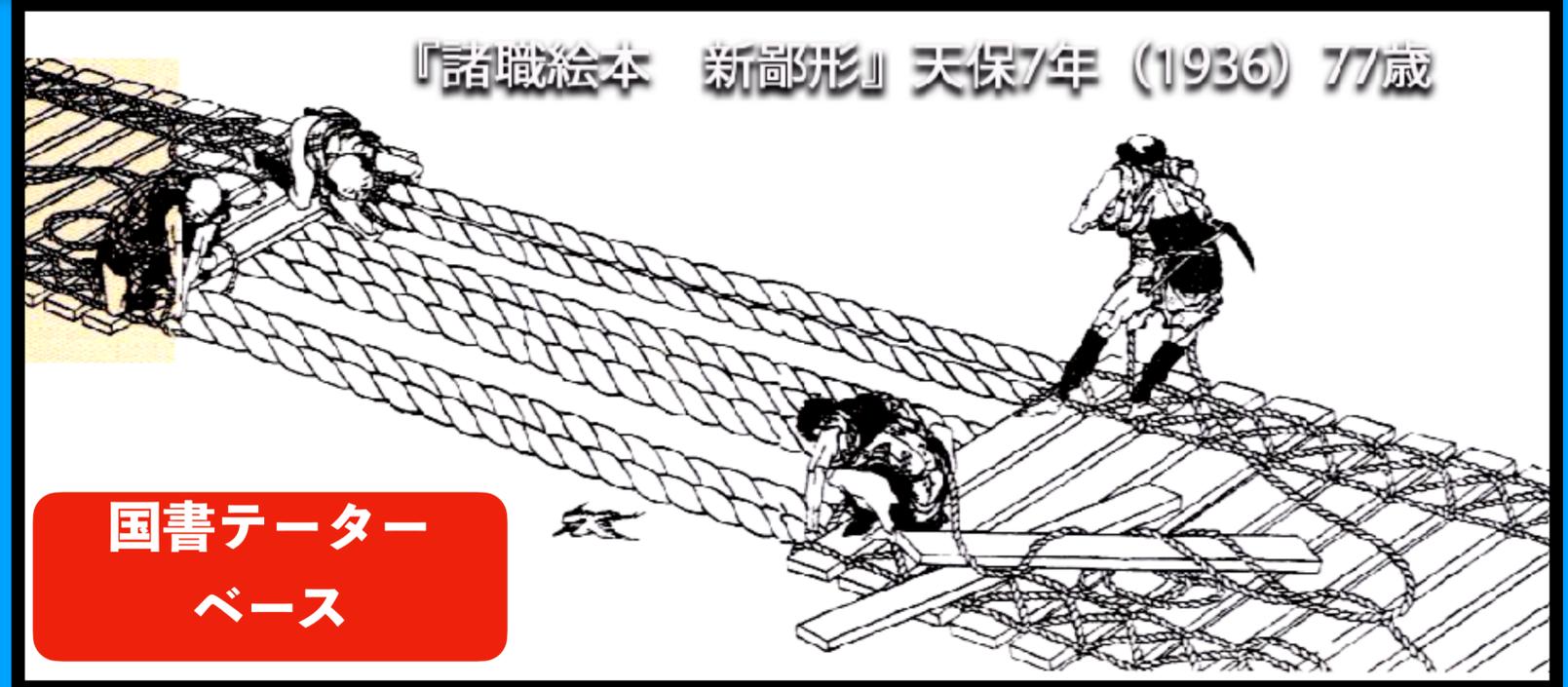
○「よつや十二そう」・・・「神奈川沖本空之図」と同時期に制作された中判のシリーズ。現在全5図が確認されており、各国に平仮名で画題と落款が記されている。単に洋風表現を採り入れるだけにとどまらず、大胆な構図やデフォルメなど、北斎一流の個性も発揮された、芸術的水準の高い作品である。

○『北斎漫画』半紙本1冊文化12年（1815）56歳・・・森羅万象を描いて収めたこの絵手本のなかには、西洋からの透視画法も紹介されている。図版右は、「三ツワリの法」（三ツ割の法）と称して、**透視画法の理論**を具体的に図示したもので、図版はその作例。

○読本挿絵から絵手本、錦絵、肉筆画にいたる種々の分野で、役者、美人、風景、古典などさまざまな題材に目を向け、**和・漢・洋の画法を広く学んで、自己の画風完成**を追い求めた北斎。飽くなき探求心で描き続ける

1804(45歳)~1811年(52歳)

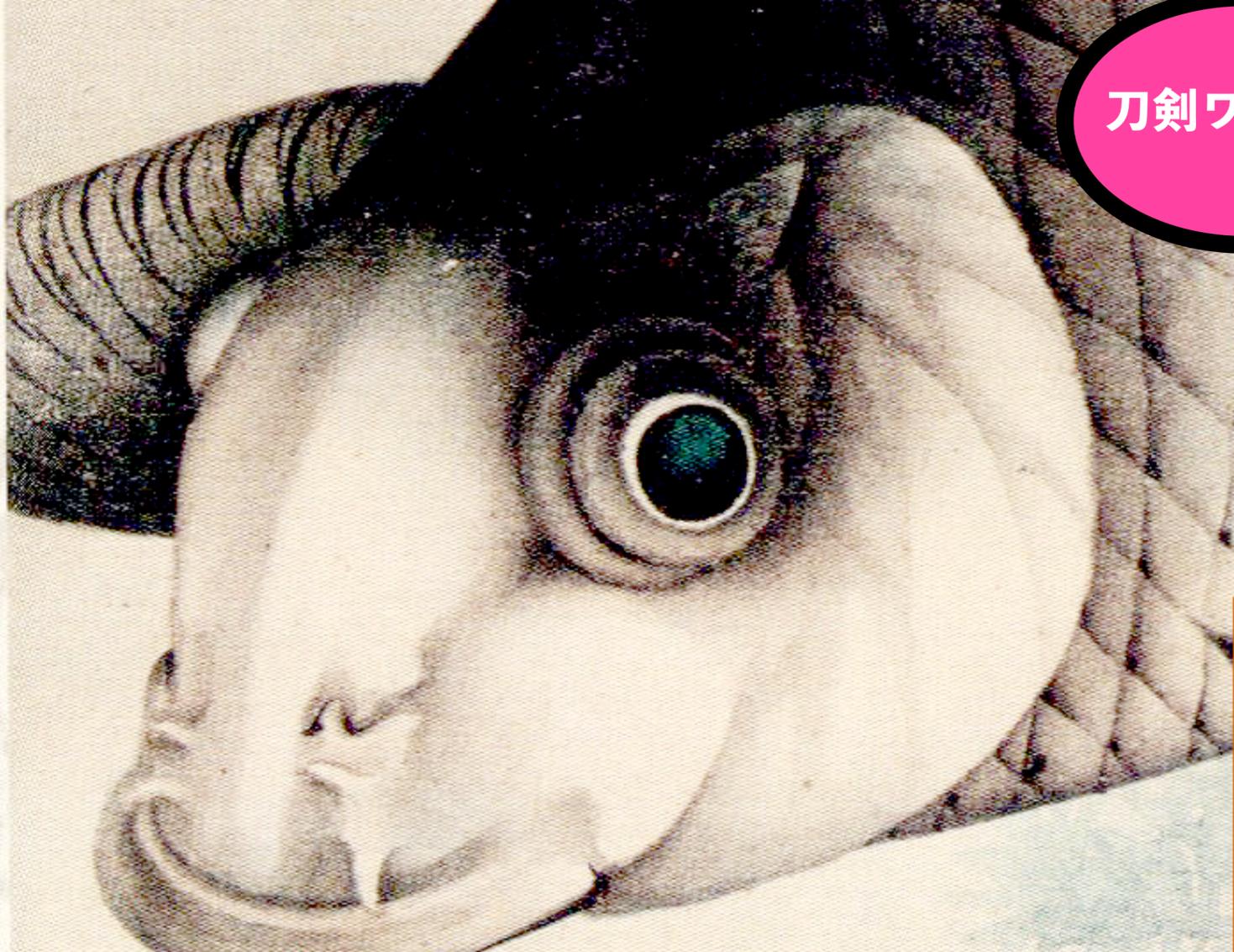
### ③-5・飽くなき探究心



○ **富嶽三十六景「尾州不二見原」大判錦絵天保2年(1831) 72歳**・・・俗に「桶屋の富士」の名で親しまれている一図。中央に大きな桶を配した書抜な構図がひとときわ目を引く。その桶を通して見える遠くの景色が、他の部分より立体的な効果を上げているのも、北斎が計算してのことと考えられる。

○ 『諸職絵本 新鄙形』天保7年(1836) 77歳・・・さまざまな分野の職人らが活用できるよう、文様や図面の割りだしなどを紹介した絵手本。「ここまで細かく描いたら、もう絵とはよべない」と客に叱られたが、「絵とはそういうものではない」と、北斎はあとがきに述べている。

○ **北斎『略画早指南』文化9年(1812) 53歳**・・・この絵手本のなかで、すべてのものの形は円と角によって割りだされるという理論を展開し、定規とコンパスを使用した作画法を詳細に説明している。



鯉魚(りぎょ)図1813年53歳



墨の濃淡を基調と  
悠然と泳ぐさまを  
体に穏和な雰囲気

製の仮面のような鯉の面貌表現  
がうかがえる。その眼球に藍を用  
いている点も興味深い。

○ 『北斎漫画』 十二篇 (1834) 74歳・・・北斎没後30年を経て完結した人気のシリーズ。読本挿絵の仕事が一段落ついた文化9年、北斎は関西方面へと旅立った。名古屋の門人牧墨僊宅に数カ月間滞在した北斎は、300余図におよぶ小さな版下絵を制作する。それらの版下絵は一冊にまとめられ、文化11年、同地の版元永楽屋東四郎から絵手本とし出版された。この絵手本こそ、錦絵「富嶽三十六景」に次ぐ北斎の代表作として名高い『北斎漫画』である。

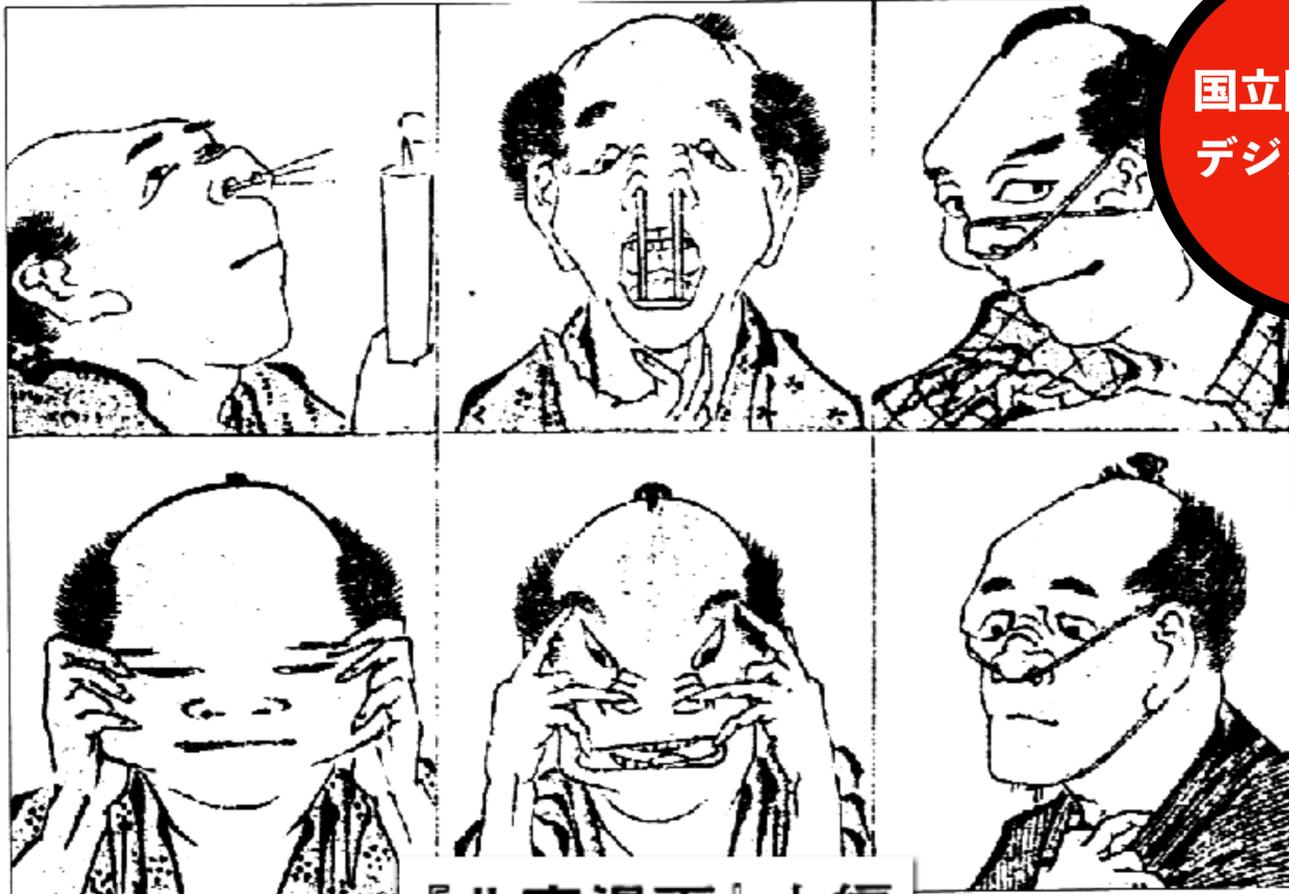
○ 1814年頃から北斎は、絵手本の制作に情熱を注ぎはじめた。絵手本とは、文字どおり習画の際に用いる手本のことで、元来は師から弟子へと肉筆で描き与えられるものであった。北斎はこうした絵手本を大量摺刷可能な版本に仕立てて刊行することに意欲を示したわけだが、その背景には肉筆で絵手本を与えるにはあまりにも門人が増えすぎていたという事情があったようである。

1812(53歳)~1829年(70歳)

国立国会図書館デジタルデータ

# ④-2・近代漫画の本家本元

国立国会図書館  
デジタルデータ



『北斎漫画』十編



『北斎漫画』九編

○ **近代マンガの本家本**・・・元絵手本として、また図案集として出版され、好評を博した『北斎漫画』だが、そこかしこに散りばめられた北斎独特のウィットも本書の大きな魅力のひとつである。戯画や風刺画に近い内容の図や、縦にコマを翻って絵を連続させる手法などは、近代マンガのルーツとよべるだろう。

○ **人体デッサンの妙手**・・・北斎は、日常のさまざまな動作を的確にとらえ、さらには体型の異なった人物に同じポーズを持たせることで生じるニュアンスの違いまでみごとに表現している。この類いまれなデッサンカは、多くの印象派の画家たちに影響を与えた。北斎に啓発された作品を遺している**ドガやゴッタン**にとって、『北斎漫画』はまさしく**絵手本**だったのである。

1812(53歳)~1829年(70歳)

## ④-3・絵が動く動画のカット割り



○ 「踊独稽古(おどりひとりけいこ)」・・・「まるで動画のカット割り絵手本」表題のとおり、踊りを学ぶための独習本として文化12年(1815年)夏に出版された。北斎が作画と編集の双方を担当、藤間新三郎が補正を行っている。収録されているのは、「登り夜舟」「気やぼうすどん」「悪玉おどり」「団十郎の冷水売」の4曲の振付。人物の姿態を連続させて描く手法は、**現代のアニメーション**そのものである。



1830(71歳)~1833年(74歳)

⑤-1・錦絵「風景版画家の誕生」の時代



「富嶽三十六景」金谷ノ不二1831年・72歳



富嶽三十六景「駿州江尻」大判錦絵天保2年(1831年・72歳)



○「富嶽三十六景」「東海道金谷不二」大判錦絵1831年・・・当時風景画という分野は存在しなかったと思われるが、一連の北斎作品は、各地固有の景観に季節や風物を織り交ぜて描く名所絵とは趣を異にする。東海道24番目の宿駅金谷の先に大井川が橋もなく歩行渡りで越えるしかない街道一の難所である。

○富嶽三十六景「駿州江尻」大判錦絵天保2年(1831年・72歳)・・・東海道第18宿として栄えた江尻は、三保の松原の景勝地でも古くから知られていた地である。その江尻を画題に北斎が描いたのは、強風に悩まされる旅人であった。木々の葉は飛び散り、懐紙が宵に舞うなか、人々は手で笠を抑えて前屈みとなりながらも歩を進めていく。そこから一番に感じとれるのは、描かれていないはずの強風であろう。北斎はこうした人物や景観のとらえ方によって、見る者に「風」を強く意識させる手法を、絵手本などでたびたび行っている。

1830(71歳)~1833年(74歳)

⑤-2・錦絵「風景版画家の誕生」の時代



富嶽三十六景「山下白雨」大判錦絵天保2年(1831) 72歳頃



富嶽三十大景「凱風快晴」大判錦絵天保2年(1831)

○ひとつの画面に四つの空模様富嶽三十六景「山下白雨」大判錦絵天保2年(1831)頃・・・冠雪を抱いて白く輝く山頂は、雲ひとつない快晴の空だ机中腹は夏雲に軸われ、一面黒々とした山麓には赤く光る稲妻が見える。おそらく地上では、「山下白雨」と表題にあるように、にわか雨が降っているのだろう。このようにさまざまな気象条件を一画中に盛り込むことで北斎が表軋したのは、天候をも超越した存在である富士という山の峻厳な姿だった。

○朝日に赤く染まる神秘的な光景・頃・・・富士山は、夏から秋にかけての早朝、朝焼けに山肌を赤く染めることがあるという。その一瞬の神秘的な現象をとらえたのがこ一般に「赤富士」の名で知られるこの「凱風快晴」である。空一面の鱗雲と山容のみという単純な構図だけに、臨場感は一層高まり、画面には靈蜂の名にふさわしい気高さがあふれている。

1830(71歳)~1833年(74歳)

⑤-3・錦絵「風景版画家の誕生」の時代



砕け落ちる波



なだれ落ちる波

○ 風景を望遠や接写を巧みに使い分ける北斎の眼は、まさにカメラそのものだ。「神奈川沖浪裏」での波頭のとらえ方は、**1/5000秒の超高速スピード**でシャッターを切った瞬間のようだと見る説もある。

○ **富嶽三十六景「神奈川沖浪裏」大判錦絵天保2年(1831)**・・・巨大な波は今まさに砕け落ちようとしはどうその下の小舟は襲いかかる波濤に抗うこともできぬまま、ただ潮流に身をまかせている。北斎はその光景を、まるで同様の舟に乗っているかのような低い視点でとらえた。荒々しくも雄大な大自然の威力を、みごとに表現した一図である。**印象派の作曲家ドビュッシー**がこの作品に靈感を受け、**交響曲『海』**を作曲したというエピソードもある。

ドビュッシー

1830(71歳)~1833年(74歳)

⑤-4・錦絵「風景版画家の誕生」の時代



○ 諸国瀧廻り「和州吉野義経馬洗滝」大判錦絵天保4年(1833)頃・・・義経が馬を洗ったという伝説のある滝だが、世に広く知られた名瀑ではなく、本シリーズが名所絵とは異なる視点でとらえられたものであることが知れるだろう。山間の小さな滝で二人の男が馬を洗うのどかな情景のなかにも、水量の豊かさや流れの勢いを実感できる一図である。

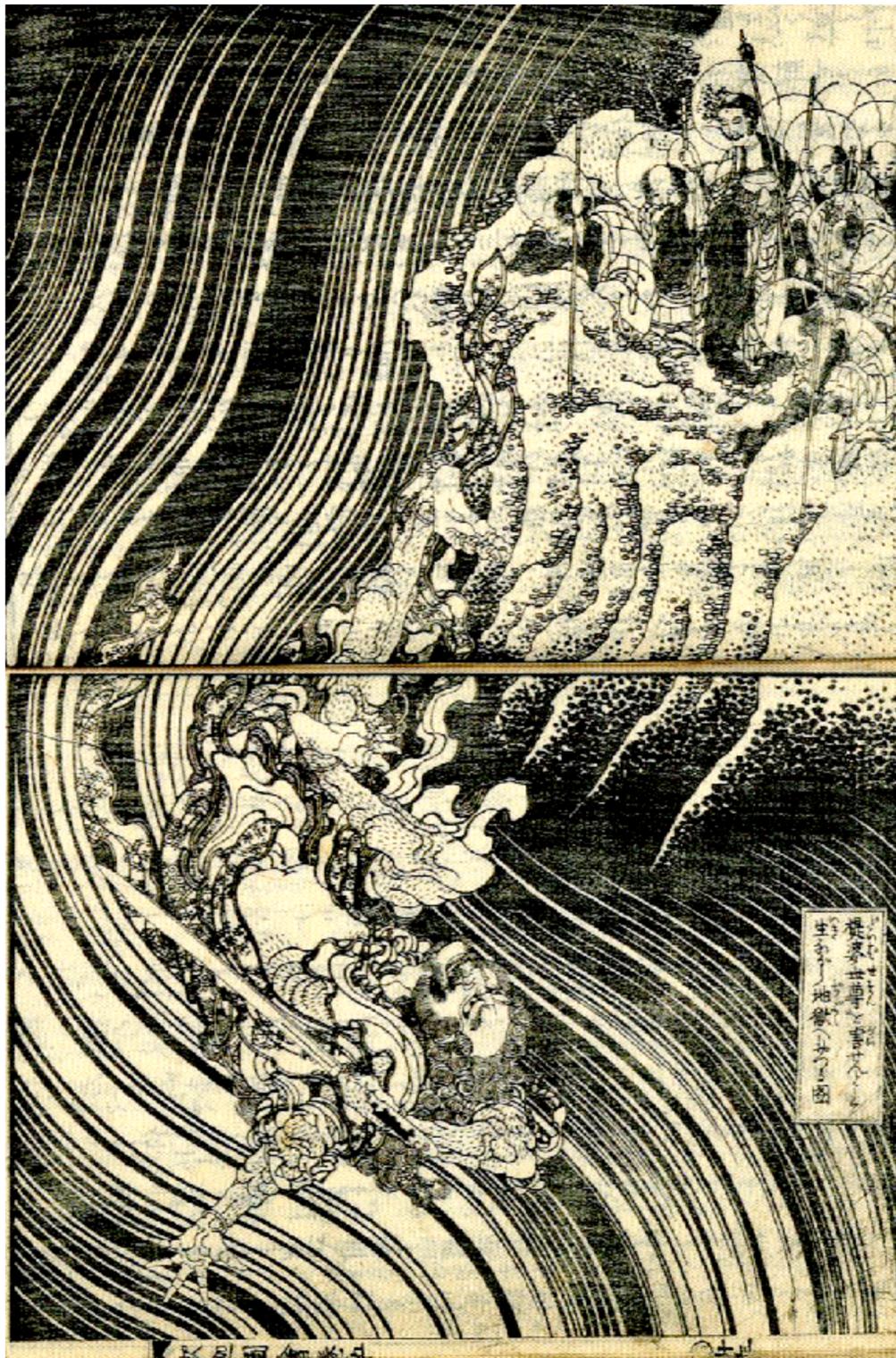
○ 諸国瀧廻り「下野黒髪山きりふりの滝」大判錦絵天保4年(1833頃)・・・黒髪山(男体山)の東に位置する霧降の滝は、華厳滝、裏見の滝とならぶ日光三名瀑のひとつ。東照宮の参詣者にも古くから親しまれてきた景勝地である。幾すじにもわかれて落下する水が動感豊かに表現されており、その滝にじっと見入る人々の静的な描写と好対照を成している。



諸国瀧廻り「下野黒髪山きりふりの滝」1833頃74歳

1834(75歳)~1849年(90歳)

## ⑥-1・肉筆画の時代



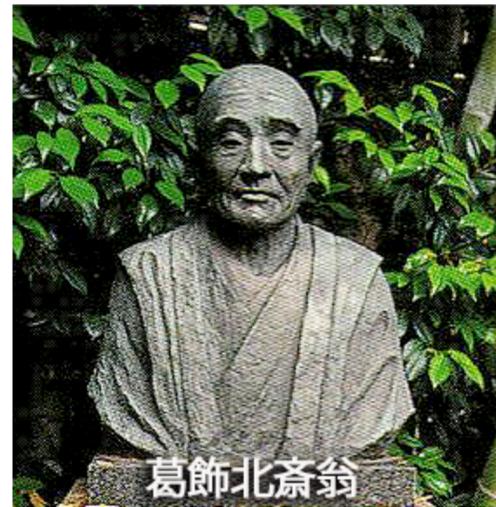
○ 斬新な発想力と緻密な描写が光る  
最晩年期の読本『釈迦御一代記図  
会』弘化2年（1845）・・・山田意斎  
作の読本で、表題どおり釈迦の一代  
記を著したもの。北斎はその挿図  
を、現代の劇画にも匹敵する斬新な  
想像力や表現法を駆使して描いた。  
こうした自由な創作意欲と詳細な描  
き込みは、晩年になればなるほど色  
濃く顕れた傾向である。



○ 『肉筆画帖』 「塩鮭と鼠」 絹本着色1帖・・・肉筆画でありながら版元西村屋より売  
りだされた、11枚から成る画帖。ほぼ全図にわたって爽快感に満ちた華かな彩色とモダ  
ンな構図が認められ、当期を代表する佳作と賞されている。天保の飢饉（1836）で版元  
らも困窮状態にあったなか、一計を案じた北斎がいくつも肉筆画帖を絵草紙屋で販売さ  
せたという話が伝わるが、本作がそれに該当するかは明らかになっていない。

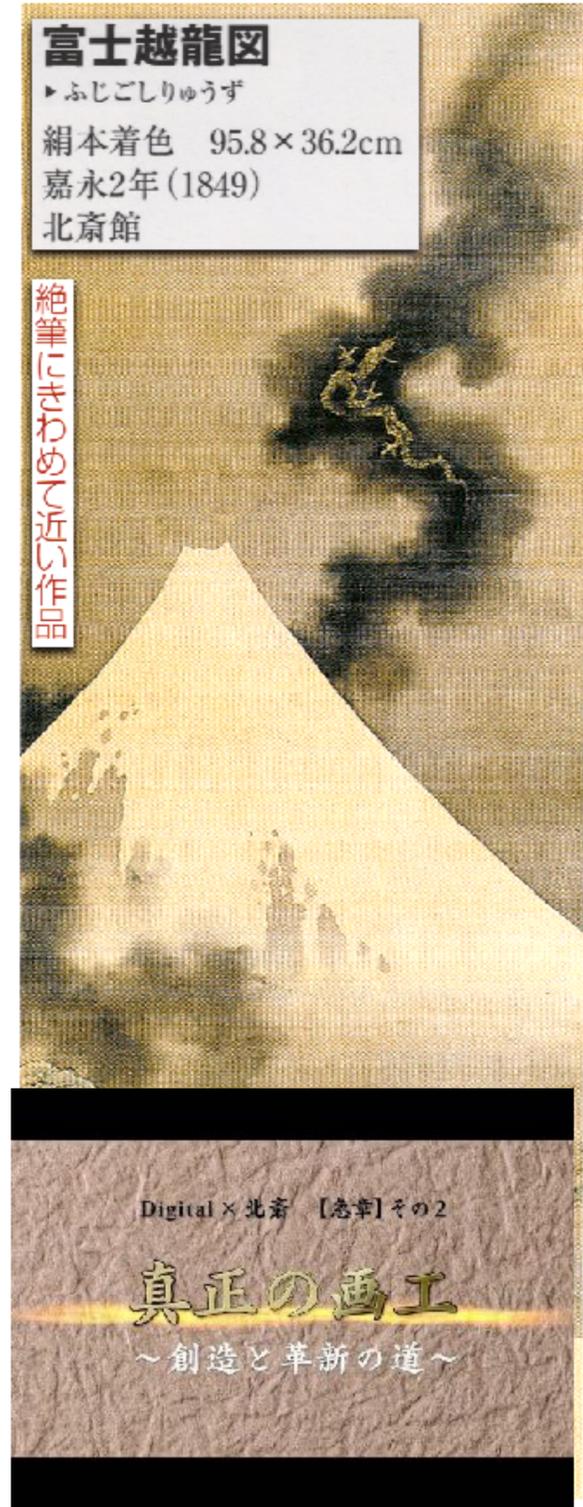
1834(75歳)~1849年(90歳)

# ⑥-2・肉筆画の時代



東京都指定旧跡  
葛飾北斎翁  
葛飾北斎(一七六〇―一八四九)は江戸後期の浮世絵師で、葛飾流の祖です。宝暦一〇年本所割下水に生まれ、鏡師中島伊勢の養子になりはじめ中島氏を名乗ります。一九歳の時に勝川春章の弟子になり、勝川春朗と改名します。役者絵や相撲絵を描きます。春章没後勝川を離れ、狩野派、漢画、土佐派、琳派、司馬江漢の洋風画、銅版画なども学びます。北斎は寺行に當んだ人で、居を九十三度、号を三十数度変えたといわれます。肉筆画、版画などに手腕をふるい、特に風景画は称賛されています。「書畫三十六番」などが知られ、フランス印象派に影響を与えたといわれます。

千七百四十五年 定家 東京都教育委員会  
文化財を大切にしましょう



○「あと十年、いや、せめて5年生かしてくれ。 そうすれば、まことの絵描きになってみせる！」 病床の北斎を診た医者は、老衰なので助かる見込みはないと娘の阿栄に告げた。以来、門人や旧友が見舞いに訪れ、看護も日々怠りなく続けられたという。

○ ついにその時がやって来る。 **1849年4月18日朝7つ時(午前4時頃)、北斎永眠。** その折りの状況を、飯島虚心著『葛飾北斎伝』は次のように伝えている。「翁死に臨み、大息し天我をしてしばらく十年の命を長ふせしめといひ、更に謂て日く、天我をして五年の命を保たしめ、真正の画工と得へしと、言吃りて死す」画を描くことしか頭になかった画狂人らしい最期といえよう。葬儀は、翌19日に執り行われた。北斎を見送る葬列はおよそ100人。「北斎の死亡通知」北斎が死亡した当日、門人北嶺に宛てて阿栄がしたためたもの。90歳永眠

島根県立美  
術館

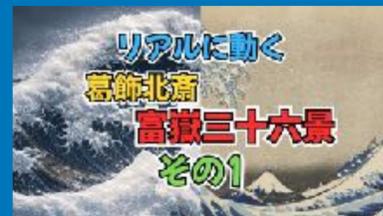
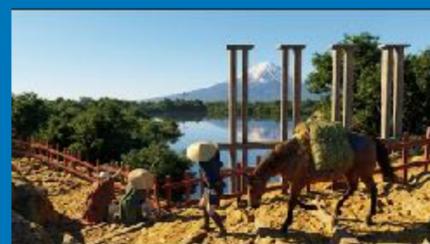
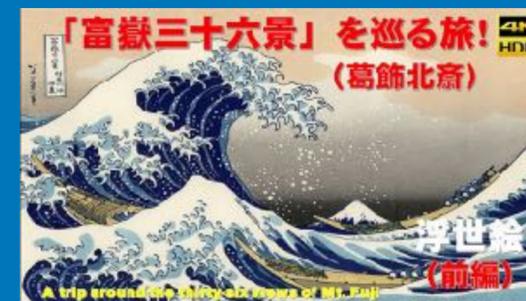
すみだ  
北斎美術館

# 葛飾北斎YouTube



お墓

北斎の裏話



○ 本日のテーマ「北斎の生涯と作品の軌跡」は  
どうでしたか。ご感想お聞かせください。

○ 今後のテーマのご要望を承りますので、忌  
憚なくお話してください。

○ また次回お会いできますこと、楽しみにし  
ています。